

百と八つの夢のリミックスが実現した。

成長著しい鬼才・キャンブテンストライダムが放つ煩惱の数々。貪欲に音楽をむさぼり続ける彼らは、休む間もなく走り続ける。

●2/15に待望のアルバム「108DREAMS」(ワンオエイトドリームス)がリリースですね。

永友：約2年3ヶ月ぶりのアルバムです。特に意識して間が空いたということではなかったんです。去年の春ごろにはもうアルバムに関するミーティングを始めたいんですけど、「それまでの集大成となるアルバムを作ろう」というわけではなく、「今から新しい何かを作ろう」という感じです。

●ちょうど、去年の春頃に「キミトベ」(シングルリリースは2005/10/19)の原形が出来てライブでも演り始めましたが(※1)、この曲が以降のキャブスト(※2)の方向性に大きく影響した気がするんですか？

永友：まさにアルバムの柱を見つけるきっかけになったのが「キミトベ」だったんですよ。最終的に曲として出来上がったのは初夏だったんですけど、主人公というか人物像(※3)がすごくハッキリ見える曲になったし、それがバンド自身にも重なって。歌詞的にはこの曲の主人公が縦横無尽に闊歩するアルバムを作りたいなと思って。

●自分自身気づかされた部分もあったんですか？

永友：そうですね。もちろん歌詞を久保田洋司さんと共作したということも大きいし、他の曲も含めてのことなんですけど、「自分にはこういう部分があったのか」という。「キミトベ」を唄って、もともと自分がポップミュージックに持っていた憧れや、ギラギラした感じを思い出して、●はい。

永友：だから「キミトベ」が完成したときに突破口が見つかったという感覚はありますね。

●地に足が着いたというか。

永友：歌を作るときに「なるべくたくさんの人に届くように」とか「いろんな人を感動させよう」と試行錯誤するんじゃなくて、限

定してもいいから「君が好きだ」と言えることの方が突き刺さると思うんですよ。そういうことを今、自分たちのリアリティでやれるということの方がポップなんじゃないかと。

●昨年の後半、ツアーやスベ中学園祭(※4)と並行してアルバムのレコーディングをされたということですが、かなりスケジュール的に忙しかったんじゃないですか？

永友：確かにスケジュール帳を見れば詰まっているんですけど、楽しかったですよ。それそれ現場が全然違うからメリハリもあって。意外とこれくらいのペースの方が自分たちには合ってるんじゃないかと思いました。全部物を作る作業だったし、その充実感をいろんな角度から味わえて。

●素晴らしいですね。「キミトベ」という曲もアルバムにすごく影響していると思うんですけど、収録曲の「サイボーグ」とか「メトロのメロス」は、まさにグルーブ感が重要な曲だね。

梅田：今回はそれぞれ曲で語られている表情を重視した感じで。歌詞とか歌に想起されてグルーブを練り上げていきましたね。

●あ、そうなんです。ということは曲を仕上げたのにすごく時間がかかった？

永友：特に「サイボーグ」に関してはものすごく時間がかかりました。原形はもっとコミカルな感じだったんですよ。そこからNINE INCH NAILSみたいなヘビーロック路線にいったり。この曲で表現したいサウンドを見つけるまで練り上げた感じですね(※5)。

●なるほど。

永友：今回のひとつのテーマとして、サウンド的には「キミトベ」に通ずる80'sやニューウェーブの全肯定な感じを追求したいなという想いもあ

って。「サイボーグ」は当然その中から生まれたアレンジなんです。だからあらかじめコーラスやキーボード、ギターを重ねることは想定して。その分、芯となる3人の演奏を如何にガッシリと作る必要があって。そこに時間をかけた部分もありましたね。

●この曲の歌詞も、さきほど永友くんがおっしゃったように色気があるんですよ(※6)。「男性」というか「艶っぽさ」が出てきたというか。

永友：歌詞を書くときも箱庭的に世界を作り上げるっていうより、部屋のドアを開いて外に出るべきだって決めたんですよ。

●部屋を出る？

永友：例えば、僕はティム・バートンがすごく好きなんです。閉じた部屋の中でやっててもすごく評価されるような人だと思っんですけど、商業映画のど真ん中で闘っている人。あの闘いっぷりはカッコいいなって。あの人のように、僕も部屋を出ようよ。

●確かに歌詞には明確な変化が出てますね。あと、「GOOD HARVEST」はびっくりしたんです。

こうゆうジャンルは一般的には無いと思うんですが、言ってみれば“農業音楽”じゃないですか。

永友：でも実は、僕はこういう曲(※7)を最も得意としているんですよ。気を抜くと全部こういう曲になっちゃうんです(笑)。

●対して、非常に雰囲気のあるバラードも2曲入ってますね。「十五夜」と「泣きそうに見えるけどオレは今笑おうとしてる」ですか？

永友：こういう曲もやっぱりアルバムには欲しいなと思って。候補としては何曲もあったんですけど、今回はこの2曲を。

●「十五夜」の歌詞とかは、今までのキャブストでは絶対にあえないですね。まさに色気の塊の

ような内容で。

永友：この曲の歌詞は全部、久保田洋司さんをお願いしたんですよ。「月のことを唄いたいんです」って伝えて。

●はい。

永友：それで久保田さんから歌詞が届いて読んでたとき、正直、この歌詞を唄っている自分が想像出来なくて(※8)。

●はい(笑)。

永友：歌詞の内容的にもそうなんですけど、難度も高くて。

●唄うのが難しいんですか？

永友：サビに「十五夜ねと君が言う」とありますけど、これは「十五夜ね」と君が言う」ということで、1つのフレーズで発音者が2人いて。実は複雑なんです。

●入れ替わりがあるんですね。

永友：そうですね。この曲に関しては自分の解釈が正しいのかどうかわからないんですが、歌入るすときに「死んじやったジョン・レノンが生きているオノ・ヨーコに対して」唄う感じでやってみました。

●ああ～、なるほど。

永友：歌詞をそのまま受け取ると、初々しくて若い2人のラブソングじゃないですか。そういうつもりで久保田さんも書いてくださったと思うんですけど、でも、意外とそうじゃないのではないかと仮定して。

●なるほど。久保田さんに書いていただいた歌詞に、もうひとつ永友くんがりのストーリーを紡ぎ合わせたわけですね。

永友：はい。若々しいカッパルじゃなくて、実はいろんな経験を重ねた末のカッパルなのではないかと。そういう視点で唄いましたね。

●深いですね。

永友：考えましたよ、今回は(※9)。

●先ほど梅田くんが「歌詞の内容や表情によってサウンドを練った」とおっしゃってましたが、ヴォーカルも含めて音楽に忠実になったというのか。

梅田：そうですね。前にライブで中島ゆきさんの曲をカヴァーしたのがすごくいい経験になったんです。【十五夜】も、まずは歌詞を聞いて味わって、そこで感じた表情をどうやってサウンドで表現していくのかを考えて、それがきっかけになったんですよ。【十五夜】も、まずは歌詞を読んで味わってみて、そこで見えた月夜の情景とか、耽美な感じとか、儂とか。そのイメージを目指してベースラインを弾いてみたり。●なるほど。

【環境と読者に優しいキャブスト注釈】

- ※1：初めてライブで演奏したのは2005年3月16日@名古屋。手応えを感じた永友。
- ※2：キャンブテンストライダムの略。他にも「キャブテン」や「ライダム」などと呼ばれる。多少強引である。
- ※3：九州から東京に出てきたオイドン。大都会東京に違和感を感じているが、自分のスタンスを貫き通して真っ直ぐに立つ男。
- ※4：【熱血！】スベジャ中 学園祭2005～初冬ギロップン～の。コントやライブに大活躍の永友。楽しかったらしい。
- ※5：梅田は、「この曲ではサイボーグ感を出したかった」と胸の内を述懐する。
- ※6：男女の微妙に冷めた雰囲気「サイボーグ」という比喩で表現した名曲。
- ※7：土着的な大きなうねりを持った曲。大収穫を祝うときに唄うのがオススメ。
- ※8：「君の胸元を/探る指」というフレーズがある。
- ※9：考えた。
- ※10：改造に改造を重ねたクセに、タイトルの「パーズデー」は仮タイトルをそのまま採用した。ご察しの通り、歌詞にあるフレーズ「オレのバスで」のシャレである。
- ※11：アナログフィッシュの下岡氏 (Vo./G.) に意見を訊いたところ、「1stは【プロコリー】だったから2ndは【プロコリー】でいいんじゃない？」と言われたらしい。他にも「国宝」なども提案された。
- ※12：眠れない夜もあったらしい。永友は案外胃が弱いのだ。近況：相変わらず神保町にハマっている永友。正月に箱根に行って温泉の良さを改めて実感した梅田。現在ドラムブームの菊住 (パート：ドラム)。

梅田：そうやって作ったサウンドと歌詞が相まって届けばいいなと思いますね。

●でもそういう一体感は聴いて感じますよ。曲作りの段階で「サイボーグ」は出来上がるまでに時間がかかったとおっしゃっていましたが、他に苦労した曲はあるんですか？

永友：「パーズデー」ですね。

●え？ イメージとしてはこの曲こそすぐに出来たような印象を受けたんですが。

永友：そういう感じですよ？でもデモの段階ではテンポもすぐで運くて。アメリカンハードロックというか【Wild Thing】のような。

●はいはい。

永友：スタジアムな感じで作り始めたんですけど、どうもイメージした感じと、今の自分たちのサイズがチグハグだったようで。だからテンポを変えたコードを変えたり、メロディを変えたり。改造に改造を重ねて(※10)。大変でした。

●(笑)。それと、通して聴いたときのパッケージ感がいいと思ったんです。

永友：曲を全部取り終えた後に曲順を考えたんですけど、いろいろ面白いアイデアがあった。でも、最終的にこの曲順でみんな通して聴いたら満場一致でしたね。

●この曲順で聴いたとき、「流星オールナイト」の落としどころがすごいなって。

永友：「流星オールナイト」は、曲を作ったときからアルバムに入れると映えるなと思って。

●そう。これ、いいです。

永友：今回のアルバムの曲順でいうと、実は「流星オールナイト」の位置を決めるのが僕の中のテーマでした。どこかにいい場所があるはずだと考えて。

●胸にグとくるポイントが「流星オールナイト」なんです。【マウンテン・ア・ゴーゴ・ツー】でも「キミトベ」でもなく、「流星オールナイト」なのがいけないな。

永友：この曲をアルバムに入れることができてよかったんです。

●それとアルバムタイトルなんです。

永友：タイトルも最後に考えたんですけど、かなり難航しましたよ。全員で意見を出し合って。アナログフィッシュに意見を訊いてみたり(※11)。

●108という数字はキャブストの背番号みたいなものだから、すぐに出てきたと思っました。

永友：ツアーの帰りの車の中でずっと考えて、「フランクフルト」の歌詞で「百と八つの夢のリミックス」という歌詞があるんですけど、そこからの引用もあって【108DREAMES】に。それ

でみんなに言ったら、すぐに決まってく。

●久々ということもあるし、自分たち自身でアルバムに対する感情があったりプレッシャーみたいなものはありました？

永友：当然のことなんですけど、曲単位で作る場合はその曲のことだけ考えて作るじゃないですか。でも、1曲1曲の積み重ねとも言え、バンドそのものが出るのがアルバムなわけ。それこそ長い間出してないから今回はキャンブテンストライダムの是否が問われるだろうし。

●はい。僕は正直、穴が開きそうでしたよ。

永友：やっぱり正念場だろうし、2年という期間を意識しなかったと言えは嘘になるし。その間の自分たちがどう成長したか、どこが変わってどこが変わってないのかが露わになってしまうんじゃないですか。そういうプレッシャーというか(※12)。

●そこどうやって消化していったんですか？

永友：やっぱり歌詞を共作させていた久保田さんや、サウンドプロデューサーの大大太さんに相談出来たことも大きかったですね。あと、何よりツアーに来てくれるお客さんに助けられた部分もあったし。演奏して音楽を届ける以前に、来てくれるだけで嬉しかったです。

●なるほど。では、最後にそれぞれ今年の抱負を教えてください。

永友：アルバムリリース後にはすぐツアーもあるし。今年、もうひと皮むかされてくれるような活動が出来そうなのが楽しみです。頑張ります。

梅田：ツアーとかレコーディングとかに向けて、体力をつけていこうかな。今年になってストレッチとか筋トレとかしてるので、この調子で。

永友：さっきのアルバムタイトルの話に関連するんですけど、108って煩惱の数じゃないですか。煩惱って消さなきゃいけない物というか、上手く付き合っていくなきゃいけない物だと思うんです。言葉の意味としてはちょっとネガティブなイメージがありますけど、アルバムを作りながらふと

「欲望とか夢が、前に進むパワーになるんだろうな」って思ったんですよ。アルバムの曲の登場人物たちも、そういう想いを抱えながらもみんな前に進むようにして…そんなポジティブなアルバムになったと思うし。

●はい。

永友：煩惱を否定せずに、前に進む力に変えていけばいいっていうメッセージでもあるんですよ。だから僕も、普段からもっと貪欲に見たいなと思うんですけど、まあ…

interview : Takeshi.Yamanaka

Cover & Interview

キャンブテンストライダム

L→R：菊住守代司 (Dr./Cho.)、永友聖也 (Vo./G.)、梅田啓介 (Ba./Cho.)